

## 認め合うこと

### 中三

先日、とある教室から「女子なのに……」という言葉が聞こえてきた。私はこの言葉を聞いたときには違和感を覚えた。「女子なのに？」つまり、女性らしく、男性らしくいることが重要なのかという疑問が生まれた。自分の個性を、女性や男性という枠で制限する時代ではもうないのではないか。

ジエンダーレスやトランスジエンダーという言葉もよく耳にするようになり、今の時代、日本の十三人に一人がLGBTQと言われている。また、若い世代ほどその割合が高く、一九九〇年代半ばから二〇一〇年代序盤に生まれた、いわゆるZ世代では五人に一人がLGBTQであるという報道もあった。私たちの身近な人にもLGBTQの方がいて当たり前だと思うと、女子だから、男子だからという言葉を安易に使うべきではないと思つた。

そんな中、昨年度から私たちの中学校の制服が

新しく変わった。デザインや機能性が変わったこの他に、女子もズボンを選ぶことができるようになった。このように、ジエンダーレスに配慮した学校が以前よりも着々と増えてきていることを身近に感じた。そんなとき、父の働く会社でも制服や身だしなみについての規則が変わるようになると聞いた。父の仕事は多くのお客様を相手にすることが多く、髪の色や長さ、制服の着用方法が厳しく規定されている。しかし、個人の想いや個性を大切にしていくこと、多様性に適した規則へと変わった。清潔感は保ちながら、一緒に働く方、お客様、仕事の内容に迷惑のない範囲で、自由に選択できるようになつた。

このように個人や個性を尊重する多様性の考えが主流となり始め、時代の変化を感じることが増えた。新しい働き方やライフスタイルが生まれたり、偏見や差別の少ない社会が実現されようとなりしていることは、とても前向きでよい変化ではないかと思う。しかし、各々の個性を認め合うことが多様性の一歩である一方で、私たちは集団の中で生活をしている。各々が個性だと主張し、あれも有りこれも有りだと好き勝手な主張や行動

をしては、集団生活は成り立たない。自分の考えを主張する人がいる一方で、日本では特に相手に配慮して遠回しの表現を使う方も多く、主張する

側との誤解や対立が生じてしまうのではないかと思う。例えば、学校の制服やルールも個性を尊重しそうに過ぎない自由度が高くなれば、T P Oに合わない格好が増えるなど、混乱を生じてしまうのではないかと思う。

自分が主張していることが他者の迷惑になつていいのか一度立ち止まり、またそれを他者が訴えたときに認められることなのか、逆の立場で考えることが大切だと思う。多様性が重要なものとして認識されている今、一人一人の主張が平等で尊重されるべきことなのかを見定めていく目や心を養っていく必要があるのではないか。

私が身近で聞いた「女子なのに……」という一言から、考えていくべきことは多いが、男性、女性ならではの特性は生かしつつ、「男性だから」「女性だから」ということに縛られる必要はないし改めて感じた。多様性を尊重していくこの時代に、私はまず、身近にいるであろう L G B T Q の方々への偏見をなくし、男性、女性という枠で見

ることなく、一人一人の人間を尊重することのできる人でありたいと思う。